

# 歴史における「構造」

——西ドイツ史学界の一傾向——

岡 部 健 彦

【要約】 ここ一〇年程の間に、西ドイツ史学界では、歴史の「構造」Struktur とか「構造史」という概念が提唱され、注目されている。この概念は、フランスの社会経済史学の影響を受けてドイツでも問題にされはじめたのであるが、戦後のドイツ史学界の新しい動向のように思う。勿論ドイツの歴史学は、古くからランケやドロイセンらの政治史・国民史とともに、ニーブール、ザヴィニー、モムゼン、イェリネックらの法制史・制度史、さらにシュモラーやビュヒャー等の経済史の伝統をもっている。しかしランプレヒト論争にも見られるように、政治史・国民史の歴史主義的理論は、他の歴史学的分野に対して常に指導的地位を誇っていた。ところが現在の正統派を継ぐ政治史学派の中堅の指導層の中には、むしろ積極的に他の精神科学や社会科学に門戸を開こうとする態度が見られる。そのもっとも著しい傾向がシーダー教授やコンツェ教授達の社会学・社会史学への接近である。本稿では、私が指導を受けたシーダーの所説を中心として、あわせコンツェ、ブルンナーの意見を紹介し、最近の西ドイツ史学界の新しい傾向としての歴史の「構造」理論について考えてみた。

## 一

第二次大戦後ドイツの歴史学界は変わっただろうか。ランケ以来「学問としての歴史学」を確立し、近代史学の正統を自他ともに認めていたドイツ史学は、ナチの支配と大戦をどう見るのであろうか——こうした問題は、少くとも歴史主義の理念を深く体験した日本の歴史家、否おそらくはドイツの運命に関心をよせるすべての外国

の歴史家にとって、切実な期待であり不安であつたらう。何故なら、ドイツの歴史主義こそは、歴史家の生とその判断を内奥からかきたてる魂の源泉であつたから。しかしこのような関心は決して心地よい学問的環境にはぐくまれていない。敗戦日本の激動の中にあつて、ドイツの歴史は過去の日本の歩みと対比されつつ、その「後進性」を強調されるとともに、ドイツ史学の保守性や政治史・理念史の偏重を指摘され、他面、社会経済史や階級史観の流行の前に、歴史主

義への関心はしばしば軽視され、時には日蔭者あつかいを受ける傾向があった。また戦後に復刊された西ドイツの『歴史学雑誌』を手にして、それが戦前と趣を同じくしており、戦後のドイツ史学界は注目すべき変化を示してはいないと語る人々もある。しかしはたしてそうであらうか。ごくわずかの研究者が、それにも拘らず戦後西ドイツ史学の重要な動向を紹介している。私たちはF・マイネッケ、G・リッター、L・デヒオ、W・ホーファー、さらにH・ロートフェルス主催になる「現代史研究所」等の業績について適切な紹介あるいは翻訳の労をとった矢田俊隆、西村貞二、島田雄二郎、中山治一、岸田達也、林健太郎といった諸氏を挙げることができよう。<sup>①</sup>

現在の西ドイツ史学界においては、大略次のような二つあるいは三つの特徴的な傾向が認められると思う。

(一) ナチ・ドイツを含めて、ドイツの過去の発展を政治的・倫理的的精神をもって厳しく反省していること。これは先に挙げたドイツの歴史家全てに共通している点である。ナチの反文化性(野蠻)やドイツ軍国主義の仮借なき摘発、権力思想の反省等はその代表的なもので、就中リッターがその最前線に立っている。そのため、現在のドイツの青年層の中には、これ等の指導的な歴史家達が、余りに自分達の過去を苛酷に断罪しており、青年の国民的・歴史的生活への意欲を沮喪させると感ずる者が相当多くいる。これらの歴史家が、

過去の反省において自らに痛みを感じながら、国民と政治家に指示し要請している国民的再生への希望のよびかけが、逆に激しい調子を帯びた批判となって表現されていることは、どうしても充分深くは理解されない面があるのであろう。しかし彼等のドイツ史に対する反省は、政治的・倫理的判断を極端な抽象的人道主義へとおしやることからは解放されている。かつてはドイツ人が自分達の生と文化の伝統・財宝として誇ったにもかかわらず、今日では外国から不当に批判され、まさにそれこそがドイツ的悪の根源であるときめつけられたドイツの過去の中に、彼等西ドイツの歴史家達は救うべきものは救い、主張すべきことは主張する。たとえば、ルターのカリスト教的自由は、権力と權威に対する人民の屈従や盲従を教え、ドイツ人の奴隸意志的義務感の伝統を形成したとか、あるいはドイツ人は近代史の出発以来つねに軍国主義をもってヨーロッパの他の諸国民を脅かして来た犯罪者的国民であるとか、さらに、ビスマルクにおいて既にヒトラーの野蠻への架橋は予定されていたとか等々の、諸外国で喧伝されているドイツ(原罪)論・性悪説に対しては、わるびれることなくドイツの過去を弁明している。またナチに対するドイツ人自身の抵抗運動に関する研究も、このような政治的・倫理的立場からする国民への慰めと勇気づけを含むものであることは明白であらう。

(二)ドイツ史学の中に『現代史』*Zeitgeschichte* という概念が定着されたこと。この点においてはロートフェルスの功績に負うところが大きい<sup>③</sup>。彼の主催によりミュンヒェンには現代史研究所が設けられ、そこから、周知のように機関誌として「季刊現代史」が出されて、ワイマル共和制期やナチ独裁期に関する史料・研究論文が続々と発表されている。これは(一)に述べた政治的・倫理的な反省と極めて密接に関連しているのであるが、それとともにもう一つ重要な要因を持っている。「現代史」の時期区分は、今日西ドイツ史学界では、一九一七年から現在までを含むものと了解されている。

それは十月革命によるソヴェト・ロシアの成立とアメリカの第一次大戦への参戦以来、ヨーロッパ史の原理が根本的に変動した——もはやヨーロッパが、西ヨーロッパを中心とした一つの統一的で完結的な世界史としては存在しなくなったという意識に基づいている。こうした国際関係史的ないしは世界史的意識の変化は、例えばデヒオや故シュターデルマンによっても語られておりランケ以来の「ヨーロッパ国家系」を軸とするヨーロッパ理念——*Genius Europas*——が成り立たなくなったという歴史的意識が、西ドイツの「現代史」研究に対する強い関心の原動力となっている。(西ドイツでは現代史研究者の数が非常に多い。それに較べて、日本の歴史学界は、その過去への反省の強烈さにも拘らず、現代史の史料編纂は貧弱で

あり、またその研究者が何と少数なことよ。この領域は素人やジャーナリストにまかせておこうというのが日本史学界の意向なのだろうか。)なお、現代史の研究所はミュンヒェンにある前記のものばかりではない。ボンには一九五五年いらい『ドイツ対外政策研究会』*Deutsche Gesellschaft für Auswärtige Politik* という機関があり、ここでは特に第二次大戦後の国際関係に関する研究と史料の蒐集に重点をおいている。ここからは機関誌として『*Europa-Archiv*』が月二回発行され、また研究文献のほかにベルリン問題やヨーロッパ統合などに関する史料集を出版している。さらに現在西ドイツでは東ヨーロッパ研究も盛んであるが、それもまた「現代史」研究の根柢にある前述のような世界史的意識と密接に関連していることは、あらためて説明するまでもないことであろう。

(三)正統史学の「歴史像の根本的改訂」が試みられていること。先にもランケ的なヨーロッパ理念(世界史)に対する批判が現れて来ていることに触れたが、敗戦後まもなく老マイネッケは、彼の全生涯の清算書ともいべき講演「ランケとブルクハルト」を発表して、「われわれにとっても、またわれわれの後に歴史を研究する者にとっても、結局はブルクハルトの方がランケよりもいっそう重要なものとなるのではなからうか」と提案している。「勉学時代このかたランケはいわば導きの星であった」と自認しているマイネッケが、

族長のような年齢になってから、ブルクハルトの方をランケよりも重視したということは、今世紀前半を通じて彼がドイツ史学界において決めていた立場を考へるならば、まさに革命的ともいふべき発言として、世界の歴史家達から注目されたのも無理からぬことである。マイネッケが何時からそのような歴史学的思惟の転換を懐きはじめたか、また彼のこのような歴史像形成のための基礎の変動は、ランケ的正統史学に対する「反乱」「背教」を意味するものであるのかどうかという問題は、それ自体一つの歴史思想的研究テーマとして論じうるし、また實際論議を呼んでいるのであるが、今はその点に深入りしない。ここではただ、マイネッケが「ランケとブルクハルト」の中でディルタイの世界観体系の二類型（客観的理想主義と自由的理想主義）を援用して、ランケとブルクハルトを両極に据えながら、両者の関係を単純に対立撥擲するものではなく、相互に対峙し衝突しながら補い合う関係を保ち得るものとして、意味深く論述していることだけを指摘しておく。

① ではマイネッケが暗示したブルクハルトから、ドイツの歴史家達はその後の十年間にどんな意味を具体的に学びとろうとしているのであろうか。この問題こそ、私のドイツへ赴く際の、そしてドイツ滞在中の最大の関心事であった。

① この点に關して諸氏の主な業績を挙げるなら、翻訳では、マイネッケ（矢田訳）『ドイツの悲劇』（中山・岸田訳）『ラン

ケとブルクハルト』、リッター（西村訳）『権力思想史』・『ドイツのミラタリズム』、（島田訳）『教育力としての歴史』、論文・紹介では、岸田「マイネッケにおけるランケ批判の問題」『西洋史学』第四〇輯）、島田「ヒストウリッシュ・ツァイト・シュリフトの回想」『史学雑誌』五九編）・「戦後のドイツ史学界についての覚書」『史学雑誌』第六四編）、西村「リッターの権力の倫理問題」『史学雑誌』第六二編）・「西独史学の動向」『思想』一九五七年五月号）、林「戦後ドイツのランケ研究」『史学雑誌』第六三編）等を挙げる事ができる。なお成瀬治氏がリッターの講演を紹介した「ドイツ歴史学界の現況と今後の課題」『史学雑誌』第六〇編）西村氏の紹介によるウィットラム「ヨーロッパ問題としての国民的なるもの」『史学雑誌』六五編）も重要なものである。

② Rothfels, H., *Zeitgeschichte als Aufgabe*, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, I, Heft 1, 1953. なおこの論説は補筆されて彼の論文集に収められてゐる。Sinn und Aufgabe der Zeitgeschichte, in: *Zeitgeschichtliche Betrachtungen*, 1959.

③ Dehio, L., *Gleichgewicht oder Hegemonie*, 1948. derselbe, *Deutschland und die Weltpolitik im 20. Jahrhundert*, 1955. Stadelmann, R., *Hegemonie und Gleichgewicht*.

④ これらの点については、前掲マイネッケ（中山・岸田訳）『ランケとブルクハルト』とその訳者解説、および岸田論文『マイネッケにおけるランケ批判の問題』参照。

マイネッケをしてランケよりもブルクハルトの方を重視させるに至った所以は、後者の方が結局においては同時代と將來(十九世紀・二〇世紀)の発展に対して適確な予見を懐くことができたと考えられたからである。ランケは彼の時代の指導的傾向として二つの勢力、すなわち「復古的な君主制と人民主権の二原理の対立」と「物質力の無限の発展」を挙げ、人民主権(大衆民主主義)の革命的諸勢力に対してはこれを「世界史の規則的発展」をさまたげる異常なものと感じ、君主制の存続するドイツのその後の発展に安心した。また物質力の展開に対しても楽天的な信頼をよせている。

これに対し、ブルクハルトにとっては、人民主権・革命勢力は異常なものではなく、まさにそれこそが十九・二〇世紀の運命を規制する「暗黒な規則」と思われたのである。一八七一年秋(すなわちドイツ統一の完成後)、冬学期の開講に際して、彼はフランス革命時代の講義の緒論として次のように述べている。「一体、今日に至るすべてのことは、根本的には革命時代以外の何ものでもない。そして我々は、恐らくはやつとその開幕の場か、あるいは第二幕のところに立っている。何故なら、あの一八一五年から一八四八年までの外見上は平穩だった三〇年間というものは、壮大なドラマの中の

ある一つの幕間にすぎぬような様子をしめしたから。このドラマは、地球上のあらゆる既知の過去に対立する一つの運動にならうとしているように思われる」<sup>①</sup>。そして機械・石炭・鉄、すなわち物質力の無限の展開(要するに産業革命)がそれに編み込まれることにより、「権力騒動や金銭騒ぎや享楽騒ぎが生じ、これが人間を奈落の底へおいやり、国家は貪欲なひとびとの欲望をみたさんかのために大衆の要求に応じてますます強大なものにならざるを得ないであろう」という恐怖の予感をいだいたのであった。<sup>②</sup>

このブルクハルトの同時代把握は、ナチと第二次大戦を経たヨーロッパにとってははいよいよ確かなものとして、ドイツの歴史家に感ぜられた。大衆民主主義と機械技術文明——この二つの波浪は、フランス革命・ナポレオンとイギリスの産業革命いらいヨーロッパ史を動かす原理となり、十八世紀までのヨーロッパ史の構成を根本的に破るものとして理解されなければならない。換言すれば、十九世紀から今日までの時代は、「革命時代」*Revolutionszeit*として概念づけられることによって、現在の歴史的状況をよりよく理解し得るのである。

このようなブルクハルトの見解にしたがうとき、我々は次のようなことを反省して見る必要がある。①これまで十九世紀史を自由主義と國民主義の時代としてとらえ、このナシヨナリズムを歴史

形成の最も中核的力として樂觀的に批判していたのであるが、それはいまや厳しい反省を要求されることになる。たとえばビスマルクの事業（とくに国民統一事業）なども、ブルクハルトの立場によれば、それは一つの大衆民主主義的革命勢力として理解されなければならぬ。(2) フランス革命・ナポレオンの現在に対する影響・意味については、最近わが国などでも、産業革命のそれとの比較において、とかく間接的なものになってしまったというような評価があるが（産業革命はそれに対して今日においてもなお継続していると考え）、そうではなくて、両者は軽重の差別なく、ともに現代史を規制し展開せしめる原動力であると解さるべきである。

ともかく自由主義も国民主義も、また社会主義や帝国主義も、そしてファシズムや世界戦争も、これまで歴史学の列上に上げられた諸々の十九世紀・二十世紀の世界史的発展・傾向は、おそらく次のような立場において考察されることが肝要である。すなわち、前世紀以来歴史の「構造」は根本的に変わった、この歴史の構造変化は、歴史と人間にとって危機をまねく暗い要素をつねに孕んでおり、そのような意識なしには、現在の我々の立っている歴史的位置を知り、歴史の中に我々が生きて行くことは不可能である。

このような観点が、今日西ドイツ史学界において注目されるべき一つの大きな動向ではないかと思う。

ではこの歴史の「構造」Struktur という言葉をもって、西ドイツの歴史家は何を理解しようとしているのであろうか。この問題を史学史的に叙述している歴史家はF・ワグナーであり、また「構造」問題を最初に提唱したのは社会史家のO・ブルンナーであるが、とくに歴史的「構造」の理解に正面からとり組んでいる指導的代表的な人物はTh・シーダーとW・コンツェであろう。私はとくにシーダー教授の指導を受け、またコンツェ教授とはこの問題について話し合う機会があったので、この二人を中心に少しくドイツ史学界における「構造」理論について紹介して見たい。<sup>④</sup>

① Burckhardt, J., Historische Fragmente, Koehler Verlag, 1957, S. 269.

② Meinecke, F., Kanke und Burckhardt, in: Aphorismen und Skizzen, S. 151. (中山・岸田訳「一九頁」)

③ 西ドイツ史学界の「構造論」については、その問題意識に関して岸田達也氏がはじめて適切な紹介を記された（西洋史学第五十六輯）。ただリッターの「構造史」に対する態度については、後で触れるように、岸田氏と私とは多少異った考えをもっている（本稿一四三頁参照）。しかしこの小稿では、「構造論」そのものの内容、とくに社会学と歴史学の協力を主張するシーダー、コンツェ達が、従来の歴史学と社会学との対立的関係を如何にして提携関係に導こうとするかを、方法論にたち入って紹介することに重点をおきたい。なお「Struktur」という言葉は、日本

語として「構造」の他に「組織」とか「構成」等と訳した方が適当な場合もあったが、本稿ではあえて「構造」の一語に統一した。

三

「構造」論は、正統史学の歴史叙述の基華・編史(Historiographie)が、何よりもまず「国家の領域における歴史的人物の行動と決断に関係していた」こと、すなわちこの立場では、歴史は「行動する個人の英雄史詩・ドラマとして造形的に」眺められていたことを指摘する。ところが今日では、歴史を個性(Persönlichkeit)の世界劇場としてとらえることに對して、われわれは理想主義哲学の中に見出されるような情熱をもって共鳴することはできなくなっている。たとえば、大戦中に発表されたホイッソンの講演は、その最も典型的な告白であろう。「歴史の筋書が客観的になったことが問題である……最近の歴史はもはや個々の劇的人物の行動として見る事ができない……われわれの集合主義的(kollektivistisch)意識、すなわちわれわれのいわゆる現実主義(Realismus)がそうすることをお妨げているのである。……かつては歴史の数々の果実をみのらせ、さわめて潑刺としていた木は、枯れてしまっているように思われる。われわれの構想力が欠けているためではなく、歴史それ自身があり方が変わったために、その咲きはこった花はかれしぼんだのであ

①。このようにホイッソンは、伝統的歴史の秋に哀悼の辭をささげたのであった。彼もまた個性的な歴史理解が集合主義的意識にとつてかわられていることをなげいた。現代の歴史把握は、かくて個性や事件ではなく、「構造」という集合主義的(反個性的)ないしは超個性的な概念へと中心が移っている。

では、伝統的な歴史学は、超個性的な力を歴史の中に認めなかったであろうか。この点に關し、シーダーは十九世紀の歴史思想家について検討している。<sup>②</sup>

まず歴史学研究法を体系立てたドロイゼンについて見るに、彼は歴史を「道義的世界の運動」であると見る。道義的世界とは、この世界の側から見れば、意志と個人的な自由な意欲といわれるものであるが、しかしドロイゼンは個々の人間の意志行為を道義的世界の絶対的な自己規制の要素とは解さなかった。むしろ彼は「道義的權力」として我々を支配している。「道義的共通性」 sittliche Gemeinsamkeit の中に個人を位置づける。「われわれは道義的權力を道義的義務であると認識することにより、われわれを支配している道義的權力がわれわれの自己規制と融和するのを感じる」。それ故個人は、道義的權力のその時の担い手でありアルバイターとして存在し、この權力の連続関係と共通性の中に存するに過ぎない。しかも道義的共通性の表現として彼は家族、民族、社会、公共

福祉、法、権力等々を挙げてゐる。したがってドロイゼンにあっては、理想主義的価値と関連せしめられた構造概念が論ぜられており、それは決して社会学的・集合的存在としての構造が問題にされてゐるわけではないけれども、しかし彼にあっては超個性的概念が歴史の根柢に置かれており、そこから後のさまざまな観念に対する架橋が渡されるのである。

ランケもまた、ドロイゼンとは異なるけれども、歴史の構造理念をもっている。「客観的世界関連」とか「事柄の偉大な進行」とか「必然性」さらには「理念」「傾向」「運動」といった用語（しかもこれらの用語は近代史学の最も重要な術語になつてゐる）は、彼の構造理念を表現するものに他ならない。それらは、歴史それ自身が個人を圧倒する運動と変化という力を伴う「各時期における構造」(epochale Struktur)として考えられており、この「各時期に個有な（神に直接する）、各時期に対してそれぞれの全体的構造を指定する理念」こそ、歴史主義的観念だったのである。彼はまた「生成の規範」(die Regel des Werdens)を発見することが最も重要な課題であろうと語つてゐるが、それは歴史の展開進行する過程の中に「動的な構造」の法則を求めたことであつた。ただし彼にあっては、この構造の法則は普遍的な（時間と空間を超えた）ものや、ましてや人為的におきかえ得るものではなく、それぞれの歴史的な生

成過程に個有な原理なのであり、それがランケの言う *historische Prinzip* である。しかも、このような構造原理は、国家の歴史的に表出されると彼は考へる。何故なら、国家こそ「制度と社会のあらゆる様式に生氣を与え、人間社会の諸形式を規制する原理・実体」であると思われたから。したがって、彼は、歴史の生成の中における個性の独立的な役割に対しては終始懐疑的であつた。ともかく「各時期における構造」と「国家の政治的構造」とが、ランケにあっては人間を歴史の中で規制する最高の「必然性」であつたばかりではなく、歴史の運動そのものが構造を具体的な形として示して行く最も強力な力であつて、国家はその力の独特な原動機なのである。

歴史を動かす超個性的な力に対する評価のしかたで、ランケとは違つてゐるが、トクヴィルもまた重要であろう。彼は、「社会の状態」*l'état social* が、諸民族のあり方を規定している法律・習慣・理念の第一の根源であるとする。ただし彼の「社会の状態」なるものは、精神的に創造された構成体であり、マルクスのようなイデオロギーの上部構造ではない。彼は、自分の時代の精神的原理を平等 *égalité* であると考え、この平等という構造理念の力には、何人も抵抗阻止しまた避けることはできないことを予言する。

ブルクハルトもまた、ランケやトクヴィルとは別の構造を考へてゐる。彼においては、一つの支配的原理が問題なのでなく、歴



史の舞台には三つの「力」Potens すなわち国家・宗教・文化(社会は附属的なものとして文化の中に含まれる)が登場する。この三つの力は、ブルクハルトにとって歴史的生の主要な構造であり、それらは相互に衝突し、絡み合い規制し合い、編み合わされながら、歴史の運動のその時々を方向を保つ。これら三つの力は超個性的な力であるが、しかし我々には個性的ないしは人間類型のように見える。そして個人は、これらの「力」Potens に対してなお個有の力を保持する。したがってブルクハルトの三つの力は、「現在・過去・未来にわたって常に耐え忍び、努力し、行動する人間」に対してある調節をとる機能をはたすに過ぎぬものとなる。

なおブルクハルトにあっては、これら三つの力のうち、国家と宗教は強制的で「固定的な」力であるのに対し、文化は自発的で「変化する」力であり、しかも結局は前二者よりも高い価値をもち、歴史家が歴史の中で確認し得る最も重要な基本構造と見られている。このような文化の強調は、やがて、社会的組織を基礎としてその上に建てられる最高の構造形態という觀念にまで文化概念を上昇させる道を開くことになる(たとえばトインビー)。文化が社会の自発的で自由な創造物であるという、この文化概念の構成形式は、史的唯物論と一脈通ずる立場であるが、但し唯物史観においては文化は社会のイデオロギー的上部構造である。

ランケやブルクハルトにおいてはなお現実と理念との現在の一致が考えられているのに対し、マルキシズムは存在と意識を相対するものに解体し、しかもその際、意識は何らか派生的なものとして解される。そのため、ブルクハルトにおいて歴史の中になお維持されている人格主義的性質を唯物史観は喪失し、個人としての人間の行為は生産力というヴェールに包まれた圧倒的な構造概念に従属して現れるに過ぎないことになる。このような存在と意識の分裂が構想理念の中に現れるためには、その後、産業革命の開始によって人間の生活が大きな歴史的変動の支配下におかれ、個人の努力はその変動の前には無力であるという経験が必要であった。換言するならば個人の無力と無力感(マルクスにあっては疎外といわれる)は社会的運動とその経済的原因によって喚起されたのであった。こうして人間の社会的存在ということがあらゆる問題の中心に据えられる。

マルクスはこの「社会」を「自然をともなった人間の完全な実体」と定義している。人間の社会的環境は、人間の個性とそれを動かす精神的な力としてはもはや理解されず、社会的存在の中に真の人間の実在が探究されることになる。その時、人間の思惟は社会的意識の記録にすぎず、また社会的組織は人間をはじめから構成している要因であって、人間の精神の創造物とは見做されない。社会的構造は、それ自身の中に構成の法則を保ちながら、歴史的に行動する人

間に対して事物を生み出し与え、またそれを拘束するものによつて生長し、結局は自らが集合的個性 (kollektive Persönlichkeit) として解釈されるようになる。そしてこのような集合的個性の下で、あらゆる人格的存在は消滅してしまふ。要するに我々は、「社会的構造」においてはじめて集合主義的構造論に到達するのであるが、そのような思考の最も徹底した代表者がマルクス、エンゲルスであることはいうまでもなからう。しかし同様な思想は、社会学派、とくにデュルケムにおいてその代表者を認め得るし、またシュパンの思想もこれに接近する道を開いている。

以上の検討からも知られるように、近代歴史学は既に早くから、その方法意識の中に超個性的・構造的思惟を持っていた。それゆゑ歴史学は、かつて社会科学の側から攻撃を受けた場合、例えばいわゆるランプレヒト論争においても、歴史学の方法において敗れることはなかった。だが、今日に至るまで正統歴史学は、この方法意識を適切に表現すべき概念的手段に欠けていたのである。すなわちランケ、ドロイゼン、ブルクハルト、そしてトックヴィル、モムゼンにあつても、構造と個性の關係は常に歴史学・歴史叙述の中心問題であつた。歴史学は「構造」Struktur という言葉を知らずに、常に構造に関わりあつて来たのである。しかし今日我々は、ブルクハルトによつて暗示された社会的な世界革命の諸現象について記述すること

を緊急の課題としてせまられているのであり、過去の偉大な歴史学が未解決のままに残して来た「構造」にたちむかひなければならぬ。

① Haizinga, J., Im Bann der Geschichte. Betrachtungen und Gestaltungen, 1943, zitiert in: Conze, W., Die Strukturgeschichte des technisch-industriellen Zeitalters als Aufgabe für Forschung und Unterricht, 1957.

② Schieder, Th., Strukturen und Persönlichkeiten in der Geschichte, H. Z., Bd. 195, Heft 2, 1962. 本稿はこの論文に全面的に依拠している。

#### 四

では、歴史における「構造」Struktur とはどんな概念なのか。

実はこの言葉の充分な吟味は、今までのところなされていまいとンダーは言う。「構造史」が特に西ドイツ史学界で問題にされるようになったのには、ブロック、フェーヴル等のフランス社会学派の側からひきおこされた方法論上の論争が直接影響している。<sup>①</sup>この学派に属するブローデルの著作「フィリップ二世期における地中海と地中海世界」(La Méditerranée et le Monde méditerranéen à l'époque de Philippe II) は画期的な成果として高く評価されまた論争の焦点におかれているが、その中で彼は「構造の歴史」histoire structurale と「事件の歴史」histoire événementielle

とははっきり切離し、しかも前者を後者に優先させている。しかし彼は「構造史」の概念については何等定義を下していない。

ドイツではまずブルンナーが社会史に関連して構造概念を論じている。「政治史が政治的行動、すなわち自己主張を主題とするのに対し、社会史は内的構成(der innere Bau)すなわち人間結合の構造を前面におし出す考察の仕方である。……この二つの考察の仕方はいずれも他の方法を知らないですますことはできない」と。ここでは人間の結合の行為と内的構成は互に解明し合い、それによって歴史の中の事件史的な変化しやうい現象も、また固定的で比較的継続的な現象もよりよく把握され得ると見られている。コンツェもまた、社会史的構造史的考察と事件史的的政治史的なそれとの間には、克服し難い方法的対立はないと主張する。ドイツ史学の方では、このように構造の問題を政治史との対立背反としてとらえていないが、その点についてはまた後で触れよう。

「構造」という言葉と概念は、しかし社会科学の方で早くから使用され、それから歴史学に転用されたものである。なかんずくデュルケム以来、「構造」は社会学の中核概念となったが、ここでもなお決して統一的な見解には達していない。しかしK・マンハイムの「構造」概念は、歴史学に最も接近している。彼は「構造」を「一種の調整をとる特殊な法則と特殊な関連(それはある特殊な社会的

領域の中のある一定の歴史的な局面において通用し有効である)」としての「媒介諸原理」*principia media*であると説明しているが、それはちょうどランケの「支配的な諸傾向」*die vorwaltenden Tendenzen*と近似した概念規定であるといえよう。構造は、マンハイムによれば、「相互に関連し合う多くの媒介原理」から生じて、ある時期の社会的・歴史的なすべての出来事の特徴づけ、それ故さまざまな要因・要素の絡み合った複合体として生起する社会的・歴史的事実を、各時期のまた社会的な規制の面から説明すべきものである。フライヤーもまた類似した概念規定をしている。

ケーニヒはこれに対し、デュルケムに関連して、社会学的な「構造」概念を二重の方向から指摘している。すなわち第一に、社会または集団がそれによって生存し続けるところの、社会または集団の内的組織 *das innere Gefüge* を特徴的に表わすものであり、第二には、この第一の表現の中に含まれている、社会的諸関連の客観的な、価値評価から自由な、認識の可能性である。しかも第二の点はデュルケムにとって特に重要であった。何故なら、この見方は価値判断を介入させなくとも「正常な」現象と「病理的な」現象とを明白に区別しうる「関連の枠」*Bezugsrahmen* を創り出すのに役立つことができるからである、という。このような認識の方法として創り出された「関連の枠」は、社会学によって把握された社会構造の

類型であるが、それはマックス・ウェバーの理想型——現実中存在せずただ構想せられた社会(学)的類型——を超えて、「徹底的に現実類型 (Realitypen) であらうとする。こゝでは、現実性は、

「多かれ少かれ一般化された様態」の中に見られるのであり、「あらゆるそれからの逸脱は病理学の枠に属し、その際病理的なものと判断することは、もはやわれわれの好みによって行われるのではなく、一つの構造体制から決定される」。換言するなら、構造体制が様態を規定するために、自律的人格的な活動力は失われてしまふばかりでなく、あらゆる様態についての判断もまたこの構造体制によって規制されることになる。

しかしこのような社会的な規範からの逸脱を病理的とする構造概念でもって歴史学的理解をすることが妥当であるかどうかを検討する前に、われわれは歴史学と社会学が「構造」について共通の場を見出し得る点を一瞥しよう。その際まずはじめに指摘し得ることは、「構造」は、社会的な出来事と歴史との中にある相対的な固定性の一要素として把握されなければならぬこと、またそれは「継統」(Dauer) ということと密接な関係にあり、それどころかある限界内においては、事件ということで示されるような急激な変化に対して、継統を表現するものである。この「継統」ということは、今日フランスの社会史では殆んど神秘的な概念の様相を帯びている。

ここでは「長い持続期間 la longue durée」ということが事件史の急速な可変性に対立せしめらる。そのとき事件史は、「底の力 (forces profondes)」の歴史という深く静止している海の表面に生ずる、波の軽いひだを意味するに過ぎないものとされる。このようなアスペクトは歴史の実証主義の立場を超えて歴史の「実在論」に陥ることになり、社会的構造は、スコラ哲学のような「実体形式」として現われるか、あるいは、社会と歴史を構成している個々の人間の意識の中に存在する必要が全くないところの、ある一つの意識を發展させる集合的実在として考えられることになる。デュルケムは「社会的事実」をそのように理解しており、また、マルクス主義の側でも、例えばルカーチは「具体的全体としての社会」を同じように語っている。マルクス主義の革命理論の中心概念である階級意識は、彼によれば「生産過程におけるある一定の典型的な状態に基づく、合理的に測定された反応」であり、「人間がある一定の生活状態を完全に理解することができるならば、恐らく彼等がその生活状態の中で持つであろうと思われる思想であり、したがってそれは彼等の客観的状态に適合・相応せる思想」として現れるというのである。ルカーチにおいては、階級意識は、個々のプロレタリアの具体的心理的意識や、彼等全体の大衆心理的意識にまで還元され得ない。プロレタリア階級の個々の構成員がそのような積極的な階級意識、階級闘

争の教説を主張していない時、彼等はある誤った意識にとらわれており、それはデュルケムのいう「病理的」な枠に分類されるものである。それ故ルカーチは、プロレタリアの実際の心理的意識状態をプロレタリア階級の階級意識と混同するか、あるいは前述の彼が階級意識として説明したものと混同することを、非マルクス主義的日和見主義であると見做している。

イデオロギーに関わる唯物史観は別としても、歴史・社会における「継続」をあらわす「構造」の概念に対して、歴史学はどのように対応すべきであろうか。まず第一に当然のこととして言えることは、今日では如何なる歴史叙述も、社会的諸現象に対する基礎的名称としての「構造」概念を欠くことはできないということである。

歴史学は前節で見たように、従来から超個性的一般的なものについてさまざまな規定を与えようとしていたのだが、それらの試みに対して構造概念は思考純化をもたらす総括概念となり得る。しかもこの構造概念は、現代われわれが技術・産業時代のただ中において、その社会的なプロセスと構成がいよいよ重要になって来ていることを経験・意識していることから生じた反映であるばかりではなく、今日の学問的理論が相対的一般性を類型ないしはモデルとして認識しようと試みて変化しつつあることから生じたものでもある。この類型ないしはモデルを得ようと努めることは、最近の歴史学におけ

る一つの正統な目的であり、特に法制史や制度史の部門では以前から試みられていた。各時期の社会的根本規制を何人も無視できなくなっているが、しかしこの社会的根本規制は内容のない形式概念に墮したり、あるいはすべての歴史的現象を絶対的に拘束支配するような地位を与えられてはならない。一般に歴史的現実には、歴史的判断を規定する種々の規範を創り出すが、しかし、どんな種類の規範も、反対に、より高次な客観性をもった歴史的現実を創り出すことはない。歴史家はしたがって、ある時期の優越的な規制力をもった「構造」を基本的な基準として、それから逸脱するものを單純に「病的な一現象ないしは意味なき阻害的附着物として把握することはできない。たとえば先に触れた階級意識の問題でも、ある現実が存在した階級状態に対する個別的で集合的な多様な反応から理解されなければならぬことは当然であり、ある一般的な価値観念を手段として構成される仮定的・客観的な階級状況から判断されるべきではない。また別の例を挙げるなら、十九世紀の国民運動は、強力な市民層の形成という規制力をもった一般的な社会的構造の前提に立っているが、それにもかかわらず市民層の形成という現象形態一般の普遍性は、個々の国民の特殊な諸相の背後においてのみ把握され得るのである。ここでは一般的なものと特殊なものとは、決して健全なものとの病的なものとして対立させられず、両者はともに歴史的に

活動的なものの本質を規定しているのである。したがって、自由主義的な市民的立憲主義の政治形態について、十九世紀ドイツにおける大臣の責任を伴わぬ立憲君主制に対して、ドイツではしばしば早くから、先験的にこれを異常なものの病的なものと称しているのであるが、しかしこのドイツの形態はさまざまな歴史的諸傾向の特殊な妥協形態を示しているのである。しかも同時に、十九世紀のヨーロッパ諸国に強く作用した普遍的傾向、すなわち統一的政治体制をもとめる力も、そこに動いている。それ故歴史家は、個々の歴史的事象に対して、逸脱や病的なものの判定と共に、ある先験的価値基準をともなった「先進性」、「後進性」といったような判決を下すことにも自制する必要がある。

歴史的諸時期は、単純にその社会制度から導き出されるのではなく、それはある特殊な精神的構造を示しており、この精神的構造の様相を、歴史家は以前から「時代精神」という概念で把えようと試みていた。各時期の中には古い構造と新しい構造がともに相並んで、または重なり合って存在するのであり、継続と変化の独自の関係は、それぞれの時期的構造からその都度あらためて規定されなければならない。その際、新しい構造は普遍的に自己貫徹しようとする傾向を持っているが、しかし実際の進行においてはさまざまな抵抗に突き当たり、局限され制約される。ブルクハルトは、ある一つの要素の

「過度な拡張」と他の諸要素の「法外な抑制」という成り行きの中から、歴史的危機の成立を導出した。彼は（彼の生きた時期にとって）最近の新しい諸構造が「過度に拡張」しているという印象を抱いているが、この新しい構造に対しては、それが最も進歩したものであり、他の古き諸構造よりも高い権利を歴史の中で承認されるべきであるというような考えには傾いていなかった。しかし彼以後今日に至るまでの発展を顧みるなら、新しい構造すなわち産業的社会が、全世界の古き歴史的諸構造形態をいよいよ容赦なく侵害して行く過程が支配的であり、その結果、以前の諸時代のあらゆる遺物は、ただ「時代遅れ」という観点からのみ判断されがちである。こうした動向によって、「時代遅れ」と非難された多くの歴史的基礎が破壊されたことは、重要な問題であるが、しかしそれ以上に、歴史的感覚が破壊されていることこそ、歴史家にとって由々しい問題なのである。

① Wagner, F., *Moderne Geschichtsschreibung*, 1960 S. 89 f.

岸田「西独史学思想の動向」〔西洋史学〕第五六輯）参照。

② Brunner, O., *Das Problem einer europaischen Sozialgeschichte*, H. Z., Bd. 177, 1964, S. 471.

③ Conze, a. a. O., S. 29 f.

五

集合主義的「構造」概念が社会学から歴史学へ導入される必要性については、前節に述べた通りであるが、しかしこの概念のもつ方法的危険についても、歴史学は慎重な顧慮をはらわねばならぬことを、同時に検討して来た。かつて正統史学が、ヘーゲルの理想主義的歴史哲学の中核概念であった超越的「理性」から多くの養分をうけとりながらも、結局はその抽象的客観性に対抗しなければならなかったように、「構造」においても歴史学は、何らかの超越的価値基準に帰着するような社会学的判断の基礎に対して、警戒をはらわなければならぬ。構造は結局はただ人間によって設定された秩序であり、また人間と共に変化する現象としてのみ容認されるべきものである。構造は、たとえその中で個人的契機が後退しているにせよ、決して人間的性格を失わない。「構造は、人間をただたんに束縛するのではなく、構造を変化させまた形成する人間を要求する」<sup>①</sup>のである。人間に結びついている集合的構成体は、それを荷っている個人の人間の中に実在するのであり、それを措いては構造として存在しない。マックス・ウェバーは彼の「理解」社会学に関して、自己をデュルケムおよびその学派とはっきり区別しながら次のように述べている。「国家、協同体、封建制度といったような概念は、社会

学にとっては一般的に言うなら、人間の共同行為の特定の様式に関する範疇を表わしており、それ故これらの概念を『説明し得る』行為に還元すること、いい換えるなら、それに関与している個々の人間の行為に還元することが社会学の課題である」と。このような構造の人間に対する関係は、人間の側から見ると次のように言えるであろう。すなわち個々の人間は、彼等と共に存在している組織構成体を実現することによってはじめて彼等の生の目的を達成し得るのである、と。社会学はその対象のあるものに対して構造に一致した態度をとるのだが、この態度は、個々人の社会的に規制された要請に随う実践を準備することに由来しており、ある機械的反作用に基づいているのではない。社会的に規制された要請は、国家や他の権力組織の命令のような、強制力をもって執行し得る正規の指図命令にまで高められることもできるし、あるいはむしろ社会的集団の道德的權威に基礎をおくこともできるであろう。けれどもこのような要請は、どんな場合でも個人の実践に対するアッピールである。

社会科学においては個人と社会組織、個体主義と集合主義との絶対的な背反が形成されていたが、歴史家は一般にそのような背反に馴れていない。ただし、歴史および社会の「厳肅な実体」の中に存する対立性に対決することは、歴史家にとって重要なことである。例えば政党の歴史は、政治的であるとともに社会的なある集団組織の

歴史であり、しかも個々の個性の強い作用を伴っているのが普通である。歴史家がこの政党の歴史を叙述する時には、その政党を個々の黨員の無数の人格に解消することはできないが、しかしさりとて反対に、その党を黨員とは無関係なある集合的個性としてえがくこともできない。歴史家は、学問的理解を集約するために、法学者が例えば法人としての協会のような集団組織を取り扱うにあたつて適用するのとよく似た方法をとるのであるが、しかし彼は常にある意中保留を抱かずにこのような態度をとることはできないのである。このような個体主義的実証と集合主義的実証とのジレンマから歴史的学問を救い出すために、シュメントは「統合」Integration という概念を導入した。彼によれば、歴史学の中に出現する「自我」は、精神的生と因果的に関連する客観化し得る要素の構造をもっていない。それは精神的に生き、自己を表明し、精神的世界に参与する限りにおいてのみ存在する。そのような自我の存在を実現し本質を形成することは、ただ精神的生においてのみ達成されるのであるが、この精神的生は自己の構造の側から見れば社会的なものである。しかも彼によれば、他面において「自己自身に由来する集合的自我」が存在することは殆んどない。集合性は多数の個体の意味体験の統一的構造であり、それは個体の生産物ではなくて、その「不可避な構成」なのである。シュメントの説明は精神主義的性格が強いが、

これをより政治的・社会的な作用力におきかえることができるならば、彼の論理の本質的な部分は充分役に立つと思う。歴史叙述は生の組合せ、すなわち個人的生と超個人的生の織りなしを示すことによって処理されるのであり、個性の叙述を主題とする場合——それは伝記において明瞭にあらわれる——ですら、このような方法をとるのである。「人間の決意は、一般的状況が提示している可能性から生ずる。重要な成果は、ただ周囲の同様な性質の諸要素が共に働くことによつてのみ達成される。個々の人物は殆んど彼の時代の所産としてのみ、すなわち彼の他にも存在するある一般的な傾向の表現として現れるに過ぎない。しかし他の面からいえば、個性はそれにも拘らずやはり道徳的な世界秩序にも所属しており、その世界の中では個性は完全に独自性をもっている。つまり個性は個有の力をもつた自主的生を持っているのである。個性は、人々が好んで言うように、その時代を表現することによつて、生来の内面的衝動を通じて、逆にその時代を規制することに参与しているのである」<sup>①</sup>。

歴史の中における個性と構造の要素の解き難い相反が放棄されるなら、両者相互間の制約性と被制約制の度合いをとらえることも困難でなくなる。個人に対する社会構成体の拘束力が異常なまでに上昇し得ることを、歴史家は否定しない。それどころか個人がこの異常な作用力の中で個性を失いながら、なおある一定の社会的類型の



みを表現する可能性というものも、すべての時代に存在すると思われる。このような状態は、閉鎖的な身分的構造をもった時代や地域にとくに著しく現れる。社会的行為が社会的集団の機能力を持続するために、個人は結局は歴史的に老衰した構成体の化石のような役割をするのである。極端な例を挙げるなら、フランス系カナダ人の間には、本国において既に衰退してしまつた革命前のフランスの文化がなお保たれており、南アメリカに移住したドイツ人の集団も、一九一四年以前のドイツ的生活形式に固執しているものがある。

とにかく歴史家にとっては、社会的に適合しているものも、またそうでないものも、すべて同じように関心の対象になり得る。比喩をまじえていうなら、正教の歴史も異教史も、社会的な国教主義も非国教主義も、ともに歴史家のテーマであり、その際後者を何らか「病的な」ものとして取扱う必要はない。ただその時期その時期の基本的構造の状態と、それからの逸脱とを明確に認識することが、決定的なことである。こうすることによってはじめて、革命運動のようなある一定の社会的・政治的制度の否定から発生した諸々の運動や組織を把握することも可能となる。すなわちこれらの否定的運動や組織にあっては、価値ある体制はただその対立像の中に認められ、したがってここでは対立構造が問題とされることはいまさら説明するまでもないことであらう。トインビーの提示した challenge

と response という歴史の「二拍子」は、このような場合によく見きわめ得るのである。革命的変動の際に見出される「社会的禁欲」などは対立構造の著しい例であり、またユートピア思想はかかる対立構造の理論的に考案されたものなのである。

歴史は、人間によって創り出されるとともに人間に対して明確な姿を与えるところの構造と人間との、無限に多様な出会いを我々に示している。この出会いを型にはめず、社会的構成に対する個人の純粋な依存関係に還元しなければならぬ点に歴史の魅惑がある。現在の技術的・産業的文明にあっては、最も強力な浸透力をもつた歴史的構造から何らかの意味で逃れ出ようとする個人の期待は、確かに窒息させられている。しかし、過去において人間は常にきわめて多様な形でそれぞれの時代および時代構造と対決することができたという慰めと希望を、歴史の考察は我々に開示しているのである。

① Conze, a. a. O., s. 17.

② Weber, M., Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, in: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, S. 415.

③ Ranke, L. v., Wallenstein.

六

シーダーの見解に従って、「歴史における構造」概念を紹介して

みた。彼が指摘するように、この概念は、社会と歴史における個性に対し超個人的・集合主義的な力をあらわすものとして社会学から、また政治史・事件史に対し歴史の中の変化しない継続を意味するものとしてフランスの社会経済史学から積極的に導入されたものである。今日西ドイツ史学が、社会科学やフランスの学派からこの概念を学ぶ必要を感じた根拠は、従来の伝統的な政治史や個性重視の方法をもってしては、現在の歴史的状况を意味深く把握し得ないという反省にあることは、彼等の告白しているところである。しかし、歴史における超個人的な力、あるいは各時期を根本的に規制している規範に対して、伝統的歴史学は無知であったわけではなく、むしろそれを追及することを最も主要な課題としていた。ただそうした把え方に対する總括的概念に欠けていたのであり、それを「構造」と表現することが適切であるというのがシーダー達の考え方なのである。では「構造」概念を歴史学に適用することによって、ドイツ史学は結局は社会学に帰着するか、あるいはフランスの社会経済史学に追従すべきであるというのか。そうではない。構造概念は、意味内容に多くの制限や可能性を加えることによって、歴史学の概念としてわがものにされるべきであるというのが彼等の考えである。

第一に、社会・歴史の内的構成、現象を歴史的・社会的に作用力あるものとして関連させ存在づける媒介原理としての構造を類型化

し、その類型をもって社会的実体であるかのように把握する社会学の方法は、歴史学の構造理論としては受容できない。社会学（デュルケム）が「客観的」実在と認めるものから逸脱する現象形態を、すべて異常な病理的なものとする危険な態度から、歴史構造論は身を避けるべきだ。むしろ歴史学は、支配的構造とその対立構造との対決のあり方を見なければならぬのであり、考察に働かない異常な構造という観点からまぬがれていなければならない。この点では、我が国の社会経済史学においても反省の必要がある。ある社会学の範疇理論が、その理論の論理的必然性と思われるものをもって引き出した理論的帰結（類型）を、あたかも歴史の実在であるかの如くに混同する危険がしばしば生ずるからである。

第二に、フランス社会経済史学派に見られるような事件史・政治史と構造史との背反、とくに前者の軽視に対して、シーダーやコンツェ、ブルンナー等ドイツの歴史家は賛成しない。この二つの考察方法の間には克服し難い方法的対立はないと主張する。ここにはブローデルやフェーヴル等フランス社会経済史家とドイツの社会史家との間に、歴史考察の態度の相違があるように思う。フランスの社会経済史家は、歴史における「雜統」の契機として「最も安定している歴史的生、すなわち大衆の日常生活」をもっとも中心的な考察の対象と考える。この観点では生活の経済的領域が重視され、また

したがってその構造論も経済構造を「底の力」と考え、変化の契機としての事件史はその上に浮び漂う小波のひだに過ぎないと定位置されるのも自然な帰結であろう。ところがドイツの社会史学は、ブルンナーの主張するように、考察の対象ではなくて、考察の方法に力点をおく。その際社会とは、「人間の集団とその共同生活」すなわち「人間が相い交わって生きること」という広い意味に解釈され、それは政治や経済あるいは文化等々と対蹠的に考えられる社会ではなくて「アリストテレスが解釈している意味での社会」<sup>①</sup>である。こ

ういう観点に立つとき、生活の中での経済的分野が常に優位を占めるわけではなく、「社会」の政治的契機も文化的契機もともに軽重の差なく考察の要因とされてくる。その中で「継統」の契機・媒介原理としての構造は、その社会の生を削り出し成り立たしめている根源的な諸々の推進力 Triebkräfte として把握される。その時、政治や国家、さらには精神のもつ歴史・社会形成力も、経済・社会に劣らず重要な媒介原理・推進力として認め得ることは、我々にも充分首肯し得るところであろう。リッターがフランスの社会経済史学派に対して反対し、政治史の地位を擁護した理由は、このような歴史考察の態度の相違に由来して居るのであり、ただ単にドイツ理想主義の伝統的立場のみを固執して、社会経済史学一般を偏狭に受容れない態度をとっているわけではない。フランスの社会経済史家

を批判しているにもかかわらず、リッターもまたウェーバー兄弟の業績を評価し、さらにシューダー、コンツェ等ドイツの社会史学の新しい試みをよく理解しているのであり、両者の間には、かつてのランプレヒト論争のような背反対立はない。

第三に、ドイツの社会史学の「構造」論は、このように社会と歴史におけるあらゆる生の力に対して開かれている。それは狭い意味での社会や経済の分野ばかりではなく、前述のように政治や文化、宗教そして精神の領域においても構造を捉え得る。彼等が産業革命とともに、トックヴィルの指摘した「平等の理念構造」を現在の歴史における重要な契機と認めるのは、その最もよい例であろう。それはかりではなく、彼等は、従来の社会経済史が、実際においては経済的要因によって社会史を組み立てる態度に偏っていたと批判する。この偏向を補うためには、法制史や制度史等の構造を援用しなければならず、さらには政治史をも参加させる余地があると考えている。<sup>②</sup>このように構造概念が社会と歴史のあらゆる分野に開かれることは、従来の社会学や社会経済史における構造理論をはるかに超え、拡大された内容を賦与されることになりはしないか、という疑問が生ずるのである。その通りである。では如何にして我々はこの拡大された構造概念でもって歴史を把握することができるのか。それは構造の契機に関する無政府状態をもたらし、歴史理解に際しての混乱を

ひきおこす恐れはないだろうか。このような危惧に対して、シダーは次のように答えるであろう。これらの構造は多様な「媒介原理」の関連から生じて来るものであり、それらの関連の枠は、それぞれの時期によって各時期の社会的・歴史的事象に特徴を賦与しながら固有の組み合わせを示す。しかもそれはランケのいう「支配的な傾向」と近似しているが、構造は集合主義的概念である、と。この説明において、構造概念は最後のに時期的構造 epochale Struktur に到達し、歴史学的概念として伝統的歴史学と融和する道を開かれることになる。

第四に、構造概念がこのようにして歴史の時期構造にまで拡大される時、構造史はさらに世界史学の構想に対する一つの手懸りを提供している。ことに社会のみならず文化や精神の分野にまで開かれたこの理論は、ブルクハルトのような歴史の類型化や比較史の方法から、歴史構成の契機を把握する道を示される可能性を獲得することが期待できるであろう。この点については、なお多くの具体的な方法的手続きと、ヨーロッパ以外の世界に関する実証的研究の積重ねとに努力しなければならず、その成果は将来に期待しなければならぬが、この問題では我々もまた日本の歴史を研究することを通して、世界史学の構成に参加する道が広く開かれているように思う。しかし例えば世界史を考古学的時代、古高度文化の時代、技術・産

業時代に区分するなど、従来の三時代区分法とは全く異った基準を立てようとする努力があり、すでにヨーロッパ史学界では、世界史の構想を試みる徴候が認められるようだ。

最後に一言つけ加えるなら、歴史における構造概念は、歴史理論の立場からいえば、歴史的认识と理解の概念であり、その解釈のための方法である。それは歴史的判断と決意を誘う契機ではあるが、判断や決意そのものではない。歴史は常に歴史を知ろうとするものに判断を要請し、また歴史を追及するもの側からいえば、彼自身は自ら決意することをせまられているわけだが、ここでは個性の問題が同時に作用するのであり、本稿はその点については十分に触れない。あらためて別の機会に論じて見たい。

また構造史的理解においては類型化と比較史がなされ得ることを述べたが、我々は従来、近代史学思想は歴史主義の思惟によって深くその根柢を支えられていると理解していた。この歴史主義なるものの核心は、歴史的人間的諸力を個別化する方向において考察することにある。そこから歴史学においては、歴史の出来事の一回性とか不換置性が強調されたのである。もしも我々が歴史の中に繰返しや類型を把えるなら、それは歴史主義から逸脱し、近代史学の態度と矛盾することになるのではなからうか。この歴史学の根本に関わる疑問に対して答える義務があることも、私は切実に感じているが、

これもまた別の機会に譲らねばならない。ただこの作業のための手懸りは、やはりランタヤやポルトホルト、さらにM・ウヰムニーやマイネッタの思考の中に求められること、そして歴史の中における類型は、ヒンツェにおいてすでに考えられていたことをここに示唆するに止めよう。<sup>⑧</sup>

- ① Brunner, a. a. O., S. 469.
- ② Conze, Sozialgeschichte, in: Die Religion in Gesch.

chte und Gegenwart, 3. Aufl., Bd. VI, 1962, S. 169 f.

③ Schieder, Der Typus in der Geschichtswissenschaft, in: Staat und Gesellschaft im Wandel unserer Zeit, 1958, S. 172 f. Vgl. Hintze, O., Zur Theorie der Geschichte, 1942.

ハイデルベルクにコンツェ教授を訪ね、構造史について種々と意見を聞く機会を作って下さった甲南大学の山口和男氏に、あらためて感謝の意を表した。<sup>⑨</sup>

(奈良女子大学助教授)

# “Strukturen” in der Geschichte

von

Takehiko Okabe

„Können wir noch das Pathos des Wortes ‚Persönlichkeit‘ nachempfinden, wie es sich in der idealistischen Philosophie findet? Fast erscheint uns auf den ersten Blick ein Begriff wie Strukturen eingängiger, der die großen, alle Einzelmenschen zusammenfassenden Ordnungen und Gliederungen meint, ja geradezu bis zur Leugnung ihrer personalen Qualitäten vorgetrieben werden kann. Überdies rückt dieser in beinahe allen Wissenschaften kometenhaft aufgestiegene Begriff Menschenwelt und Natur wieder näher aneinander und gibt uns ein Instrument in die Hand, um naturwissenschaftliche und geisteswissenschaftliche Phänomene einheitlich zu bezeichnen. So ist mehr und mehr die Sphäre der Persönlichkeit in die Ferne gerückt, während die Strukturen zu einem Zentralbegriff geworden sind. Dieser Wandel, der durch viele zeitgeschichtliche Umstände begünstigt wurde, ist vielerorts, namentlich in den Sozialwissenschaften, als der Durchbruch zu qualitativ neuen Erkenntnissen, zur wahren wissenschaftlichen Methode gefeiert worden. .... Die Geschichte hatte es immer mit Strukturen zu tun, ohne daß sie das Wort kannte, aber sie ließ das Verhältnis von Strukturen und Persönlichkeiten offen, variierte es nach Epochen und Kulturkreisen und legte ihm kein feststehendes Schema zugrunde. Sie wird daher in ihrer eigenen Überlieferung bleiben können und keinen Sprung in ganz andere Denksysteme tun müssen, wenn sie die Phänomene der sozialen Weltrevolution von heute zu beschreiben hat. Dies kann nicht mehr in der Sprache Niebuhrs oder Rankes und mit ihren Methoden geschehen; die neue Situation zwingt zu schärferem Nachdenken, und, wenn es sein muß, zu schonungslosem Überbordwefen vertrauter, aber unhaltbar gewordener Vorstellungen.“ .....Mit diesen Berücksichtigungen hat Prof. Schieder sehr erfolgreich versucht, den soziologischen Begriff “Strukturen” als das Grundschema der

Historiographie streng prüfend, doch zugleich dringend in die Geschichtswissenschaft einzuführen. Wir können heute in der deutschen Geschichtswissenschaft eine bemerkenswerte neue Richtung erkennen, die von den Historikern wie Professoren Schieder, Conze, Brunner u. a. m. vorgeschlagen worden ist. Sie sind großartig bemüht, "eine Brücke von der Geschichte zu den Sozialwissenschaften" zu schlagen, damit könne die jene das Grundproblem in unserer sich wandelnden Welt viel besser verstehen. In diesem Berichte wird der Inhalt des von Schieder erwähnten Begriffs "historische Strukturen", von dem ich bei meinem Studienaufenthalt in Köln mit ihm oft sprechen konnte, im Zusammenhang mit der Soziologie vorgestellt.